

平成 27 年 9 月 19 日

北関東フォーラム

於：シムックス

中斎塾 北関東フォーラム 平成 27 年度第 8 回

今日の話題

安保関連法案が可決されました。今、外国のメディアの人達は日本の事情を知るためにわざわざシンガポールや香港で情報を得て、日本に戻って来て裏付けを取るというやり方をしている。そうしないと日本で何が起きているか分からない、という話があると以前申しました。

それを頭に置いて考えると、今回の安保関連法案で、なぜ日本の新聞はこういう書き方をするのかと不思議に思いました。反対！ 反対！ と騒いだことばかりが書いてあって、中身がどうも薄い。それから賛成側の話がほとんど載っていません。更に、外国のメディアがどう報道しているかも書いてありませんし、他の国々のしかるべきポストに就いている人達の談話もありません。何故、こういう他の視点がそっくり抜けるのかなと感じます。新聞は話半分に見るものだと申し上げていますが、話半分だけではどうも怖くなってきました。

近ごろでは大学生が学校で新聞を読んでいると、「あいつ、おかしいんじゃない？」と言われるような風潮です。活字を見る、特に新聞を見る人はおかしい奴と感じる。そんな時代になっているのではないのでしょうか。時代が変わったなと思います。今の若者はスマホやパソコンで情報を得るのでしょうか、自分で興味がある事をネットサーフィンか何かして調べていくというスタイルも悪くはありませんが、私共は出来るだけ色々な視点から、本質・大局・歴史をみるのが良いでしょう。

少なくとも今回の安保関連法案なるものを見る時には、本質は何なのだろうと考えながら見る。それから大局で、色々な立場に身を置いて見る必要があります。与党の立場、野党の立場、国民の立場、メディアの立場、警察、自衛隊・・・それぞれの立場の人の視点で見ます。日本国内の次は他の国々の人の立場で考えます。先進国の人達の立場、アジアの国々・・・例えばチベットは中国に占領され自治権を失われて、またそれが少しずつ回復してきたわけですが、チベットの国民の気持ちになって考える。他にも、中国の脅威に晒されているアジアの国々の人の立場で見る必要があるでしょう。私は陽明学を標榜しておりますので、そういう国の人達の話を知りたいと思って、カンボジア・ベトナム・タイ・

モンゴルに行きました。ミャンマーにはまだ行っていませんので、いずれ行ってみたいと思っています。実際に自分で行って、それぞれの国に住んでいる人達の腹の中の話の聞かないと本当のところは見えないと思っています。

三島中洲出版

8月はお休みを戴きました。皆さんはどうでしたか？ 良い8月を過ごされた方、坦々と過ぎたという方もおられると思います。私は赤城山にこもって三島中洲を書きました。

11月23日の嵐山の金鶏神社社稷祭での講話を頼まれまして、「渋澤栄一翁と三島中洲先生」という演題を戴きました。これは何かの縁だと感じまして、私が取り組んでいる三島中洲をその日までに出版したいと思い、出版社と打合せをしました所、9月15日までに原稿を仕上げなければならないということになりました。それで赤城山にこもって、色々な情報を仕入れるためにかなりの量の三島中洲に関する本を読み込みました。それからは頭の中で情報を熟成させてから、テープに吹き込んでいくという作業を致します。それと並行して、事務局は引用文を入力し、吹き込んだテープを起こして…と共同作業で原稿にしていきました。おかげさまで完成原稿になりましたが、途中、初めて会社に泊まりました。泊まり込みを一日と、その後は徹夜まがいのことを数日やって、何とか間に合わせる事が出来ました。

「愛と魂」のスピーチ

前回お話したベルリンでの環境問題の国際会議に、明朝の飛行機で行って来ます。私がゲストスピーチを頼まれている内容は「愛と魂」について、しかも自分自身の体験談で話をして下さいと念押しされています。何故「愛と魂」なのか、木内顧問にお聞きしました。ここ十数年、世界的な学者や経済人を集めて色々なディスカッションをしたけれども、最終的に「この話は大事です。愛がテーマです」とか、「ここから先は魂（スピリッツ）の領域に入ります」となって、そこから先が止まってしまう。そういうことが続いていて、いかげん専門家を呼んで「愛と魂」について掘り下げようという話になったのだそうです。私は専門家ではありませんが、哲学という部分では同じですから、話をしてこようと思っています。

木内信胤先生流に言えば、哲学とはものごとを根本から考えることを言うとおっしゃいます。具体的には「自分とは誰？」「私は何をするためにこの世に生まれて来たか」ということを考え詰めていく学問です。尚且つ、学問は日常の生活に役に立つものでなければ学問ではありません。難しいことを難しく説明するのは本物の学者ではない、難しいこと

を易しく言うのが本物の学者だと私は教えられました。三島中洲も義利合一論の部分で、同じことを言っていました。

三島中洲と渋澤栄一

ちなみに三島中洲の義利合一論と渋澤栄一の道德経済合一説とは合致しています。三島中洲は義利合一論を学士会館で講演し、十数年後に同じ学士会館で道德経済合一説という話もしています。中洲は本の中で、義利合一論なるものは利が先であると書いています。おぎゃーと生まれたら、赤ん坊は泣いておっぱいを欲しがらる。衣食足りて礼節を知るというけれど、衣が欲しい、食が欲しい、礼節が欲しい…と、みな欲が先なのです。利には私利と公利があるけれども、まず自分自身が利を求めるところから始まり、利を追求すれば必ず義になる。これが義利合一論・道德経済合一説です。

中村天風先生も義利合一論と同じ展開です。天風先生は世の中の聖人君子といわれる人達はみな捨欲を唱えるけれど、それは嘘っぱちで、欲があるから人間は生きていられるのだと高らかに言っています。

山田方谷は「義を明らかにして利を計らず」で、まず義（道德）から入りなさい、そうすると結果として利が後からついて来るという解説をしています。

今回、三島中洲を調べれば調べるほど、もの凄く学識が豊かであると分かりました。よくぞここまで調べたというくらい研究しています。それでいて人と争わない。とても穏やかで、人と喧嘩をしていません。そこは渋澤栄一とは異なる点だと思います。二人とも負けず嫌いという所は共通していますが、渋澤栄一は大久保利通と喧嘩をして啖呵をきって明治政府を飛び出しましたが、三島中洲はそういうことは皆無です。せいぜい文句を言ったとすれば、明治政府の経費削減によって判事が大量解雇され裁判官だった中洲も首を切られたわけですが、その時、栄一への手紙に「200円の涙金を戴いたので、小講堂を作って二松学舎を設立した」と書いています。200円の退職金ではなく、涙金という表現が中洲の精一杯の恨み言だったと感じます。

ということで、失業して家族を養うために、今で言う学習塾（漢学塾）を始めた時が二松学舎設立の初めです。その当時、軍人となるには士官学校、法曹界に進むには司法省の法学校に入学するわけですが、入学試験は漢文でしたから、漢文の大家であった三島中洲の漢学塾には学生が沢山集まりました。当時、麹町区域の35の漢学塾の平均授業料は年間143円、中洲の漢学塾は約1395円でした。10倍払っても、息子を勉強させたいという親が沢山いたのでしょうね。200円の涙金で建てた講堂は100人～150人くらい入れたようです。

が、学生で溢れたといいます。しかも教えるのは中洲一人だけだったので、洪澤栄一に宛てた手紙の中で中洲は、とんでもないくらい儲かったと書いています。

今回のベルリンでの「愛と魂」のスピーチで、日本の文化について話をしようと思っています。その中で、西行法師の和歌「なにごとの おはしますかは知らねども かたじけなさに涙こぼるる」を詩吟で披露したいと思っています。しかし、日本人は身体で情感を感じますが、言葉・理屈で理解する外国人にはなかなか伝わらないと思って、目の前にそういう雰囲気を出させるのに神社の祝詞はどうかと考えて、冠稲荷神社で教えて戴きました。ここで御披露したいと思います。

(祝詞奏上)

外国の人達とコミュニケーションをとる際には、言葉で理解し合えるという要素が勿論必要ですが、自分の国の歴史・文化を自分の言葉、又は身体で表現して相手に理解させるという能力も必要だと思います。

恒例の質問

- 昨日一日、嘘をつかなかった方
- 昨日一日、良い日だったと思う方
- 昨日一日、有難うと言い、有難うと言われた方
- 昨日一日、何か健康法を実践した方

手を挙げなかった方は、寝る時に思い出して、呼吸法だけでもやられるとよろしいでしょう。

- 昨晚寝る時に、明日を過去形でイメージできた方
これがスッと出来るようになると、良い人生になります。

- 最近、自分磨きをしているという方
切磋琢磨を実行されると良いでしょう。

君子にして不仁なる者有らんか・・・

本日は憲問篇 5～7 です。では、解説を致します。

【五】子曰く、徳有る者は必ず言有り。言有る者は、必ずしも徳有らず。仁者は必ず勇有り。勇者は必ずしも仁有らず。

孔子が言うには、徳がある人間は必ず思いやりの溢れる良い言葉を言う。しかし良い言

葉を言う人間が必ず徳があるとは限らない。仁徳がある人は必ず勇気があるものだ。しかし勇気がある人間が、必ず仁徳があるとは限らない。

言葉だけを信用しないで行動を見て判断する、と捉えればよいでしょう。

皆さんはご自分で徳があると思われますか？ 周りを見て如何ですか？

先程お話した国会での乱闘を見て、あの議員連中の誰に徳があるのかと思います。良い言葉を吐いている人など一人もいません。

「仁者は必ず勇有り」の部分で考えると、鴻池さんが「私達は戦争は絶対に起こしてはいけないと思うから、この法案を一所懸命成立させようとしている。外にいる人達は、戦争は起こさせないという点で意見が一致しているのに、なぜ反対の動きをするのか。よくよく話し合いをすれば真意が分かってもらえると思うが・・・」と発言しています。これはまともな事を言っていると感じました。

「勇者は必ずしも仁有らず」の部分で考えると、勇者とは力がある者とか乱暴者ですから、そういう議員をかき集めて国会乱闘を仕掛けたわけです。テレビ中継のためのパフォーマンスそのもので、全く酷いですね。

【六】南宮适 孔子に問いて曰く、羿は射を善くし、羿は舟を盪かすも、俱に其の死然るを得ず。禹 稷は躬稼して天下を有つと。夫子答えず。南宮适出づ。子曰く、君子なるかな 若き人。徳を尚ぶかな 若き人と。

南宮适が孔子に尋ねました。「羿は弓の名手であったし、羿は船をも動かす大力でした。どちらも武力に秀でていましたが、よい死に方はしませんでした。禹・稷は自ら農耕に従事して、長い間天下を保ちました。なぜでしょうか。」

羿（げい）は有窮という国の君主で、夏王朝を倒した後、家臣の寒泥（かんそく）に殺されました。羿（ごう）は寒泥が羿の奥さんに生ませた子供で、家老の少康に殺されました。二人とも非業の死を遂げています。

孔子が何も答えないので、南宮适は退出した。

その後で孔子が言いました。「南宮适は君子であるな。あのような徳のある人物は、そういうものではない。」

力よりも徳を貴ぶ南宮适に対して、孔子が賞嘆しています。

自分自身に置き換えてお読み下さい。孔子の年代で考えるか、禹・稷か、羿・羿か、或

いは南宮适に置くか、年代によって或いは自分の勉強の仕方によって違います。自分自身を誰になぞらえるかによって、まるっきりイメージが変わってきます。

同時に、自分の回りの人は誰にあたるか、安倍さんや麻生さんは誰に近いか、等々を考えながら読むと登場人物が生き生きしてきます。こういう見方を通すと、現在の国会の問題はどこにあるか、本質が見えてきます。

【七】子曰く、君子にして不仁なる者有らんか。未だ小人にして仁なる者有らざるなり。

孔子が言うには、大人物でありながら思いやりがまるで無い、そういう者は少しはいるだろう。しかし自分磨きがまだまだ足りない小人物で、人徳を備えている者は聞いたことがない。

皆さんは君子とはどのような人物だと感じますか。同じ「君子」という言葉一つをとっても、聖人と捉えたり、大人物と捉えたり、或いは人物と読みなさいとか、内容や自分の描くイメージによって色々なとらえ方が出来ます。

例えばこの文章の君子を、少し痩せてきて何となくうつむき加減になってきた、ちょっと小さめの人物というイメージでスクリーンに投影してみる。或いは、気持ちが高揚していれば、とにかく聖人君子として頭を下げるようなイメージで読んでも構いません。その時の自分の心持ちで読み方が大分変わりますから、聖人と読むのか、大人物で読むのか、普通の人格（素晴らしい人）で読むのか、イメージを決めて素読をされると中味が大きく変わってきます。

何度も申し上げますが、論語は自分自身に置き換えて読む、現代に置き換えて読まなければ意味がありません。論語という書物がなぜ何千年も続いているか、それぞれ自分の生きている時代に置き換えて考える、自分自身の身に置き換えているからずっと続いているわけです。果たして自分は大人物だろうか、自問自答されるとよろしいでしょう。

倫理道徳心の欠落

本日はご紹介する本は『女子の武士道』（石川真理子著 致知出版社）です。明治の日本女性の精神を貫く婦道について書かれており、なかなか面白い本です。明治・大正の世代に仕込まれた女の人は大したもの、良い子供を育てました。例えば、佐藤一斎にももの考え方を叩き込まれた孫娘の士子（こと）は、吉田茂を仕込みました。そして吉田茂が仕込んだ娘和子は、子供の麻生太郎を教育したわけです。いずれにしても明治の日本女性を調

べることによって、論語を女性の視点で見るという構想が見えてきました。

一つの新聞記事から見えるもの

新聞の見方について、3つの視点で見るという話を致しました。一つは、民主党が政権をとった時には、民主党が打つ無様な手を見る。今は、自公政権の打つ手を用心して見る。自公政権の打つ手は良い事と悪い事と両方入って来ますから、よくよく注して見ましょう。二つ目は自然災害を見る。三つ目は国債の動向を見る。

昨日の読売新聞に「軽減税率 公明が独自案」という記事がありました。これについて本質・大局・歴史で考えましょう。

税金とは何のためにあるか、税金は善なのか必要悪なのか、国家が国家として存続するために税金は必要なのか・・・税金の本質を追及します。そうしますと、木内信胤先生は「税金は安い方が良い。国が疲弊してきたら減税すべきである。増税は国を滅ぼす」と言っておられます。

次に、税金について誰がどういうことを主張してきたか。これは渡部昇一さんの本の中に分かりやすく書かれています。税金はもともと西洋は1割、東洋も1割がスタートで、9割税金をとったイギリスは覇権国家でなくなった。べらぼうな税金をとるということは、国が潰れることになると書かれています。日本が戦争に負けた時は、92%の富裕税をとっています。

今の日本はどうでしょうか。最高税率は所得税45%、住民税10%、尚且つ消費税やら諸々あわせると、実感として6割です。ですから税金の視点で見ると、日本は間違いなく減びる方向に進んでいます。TPPなるものも国が滅ぶ方向へと間違いなく進んで行く流れです。そうやってだんだんと各国が消滅をしたり、自給自足国家が生まれる。そういう新しい流れが、この税制の論理の中から見えてきます。

本質・大局・歴史でみると、今動いている公明党の動きはまったく目先の事だけ、自分の党の利益だけを考えています。

もう一つ、中国の天津での爆発の記事についてお話します。先日、大野参与に話を伺いました。あれは中国版の9.11だと捉えていると言っておられました。軍人でかなり力を持っている人がかなり亡くなっているという話でした。本当の死者数と真相は闇の中ですが、周金平は今のやり方を3年は続けると言っていますから、今後かなりの死者が出るのではないかと推測できます。結果的に中国は解体するでしょうし、その後は緩やかな連邦制に動いていく、そのための布石を打っていると見えます。そして足掻きながら、沖縄

を独立させようとか、余計な動きをしていると思っています。

是非、新聞を見ながら、どういう意図で世の中が動いているか、動かされているか、記事の影に隠れているものは何かを推測しながらお読み戴きたいと思います。

本日はこれで終了致します。有難うございました。